

「ブリーズヘラー®センサー」の使いどころ

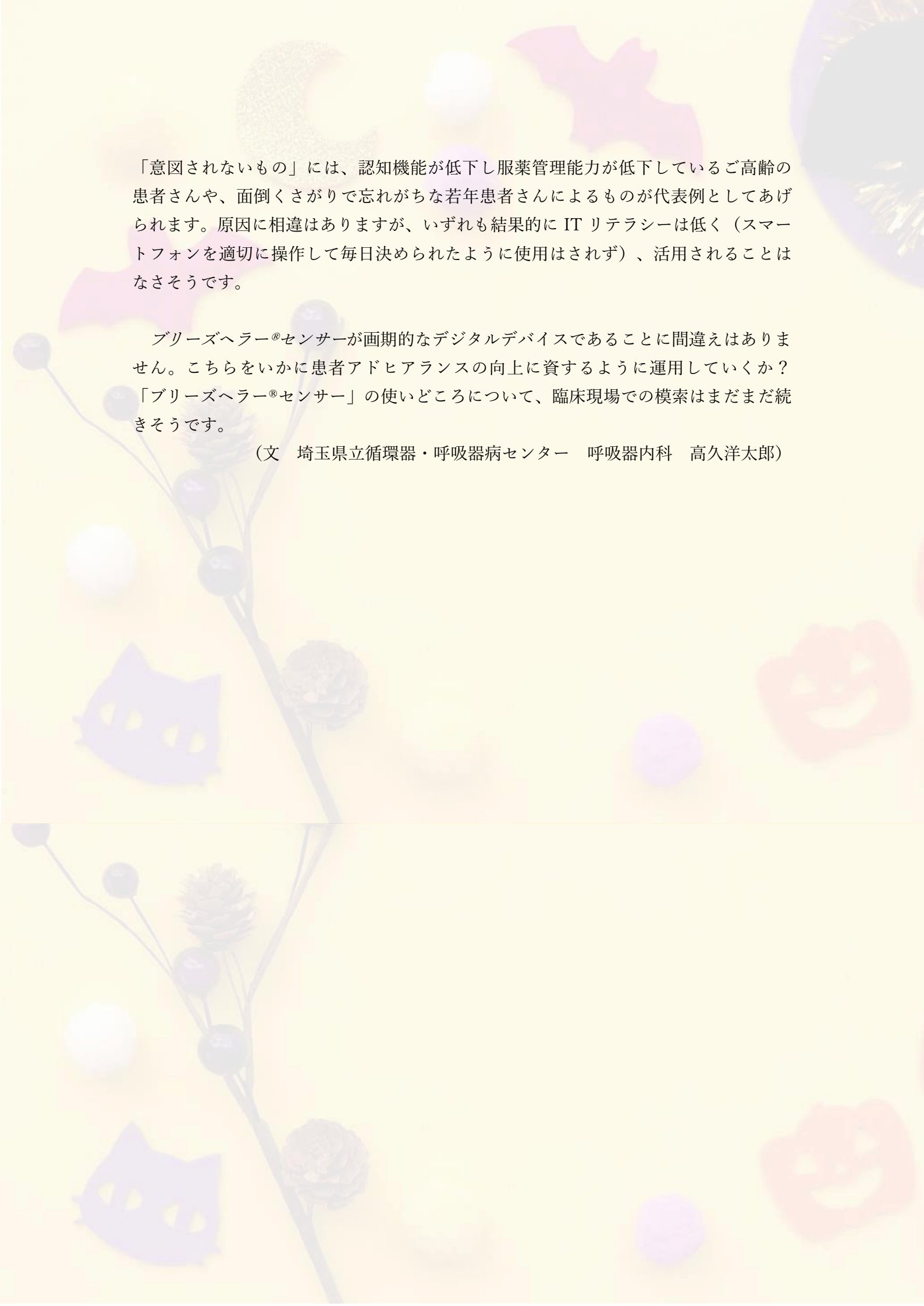
「ブリーズヘラー®」に装着するセンサー「ブリーズヘラー®センサー」を皆様ご存じでしょうか？2020年8月26日付けのプレスリリースで、ノバルティスファーマ株式会社は次のように発表しています。「ブリーズヘラー®に装着するセンサー：ブリーズヘラー®センサーと Bluetooth でつなげることが出来る プロペラ®スマートフォンアプリにより、吸入確認、服薬リマインダー、および患者さんが選択すれば主治医に日々の服薬の記録を共有することが出来ます。」



特に費用が発生することなく、医師あるいは薬剤師からの請求により配布され使用できます。しかし、こちらのデジタルデバイス、登場から 1 年以上経った現在でもあまり普及はしていないようです。

確かに、このデジタルデバイスは画期的だと思います。吸入器にセンサーを装着しスマートフォンと連動させることで、リマインダー機能で服薬を促しつつ、日々の服薬も記録する。こうした情報は、医師・患者間で共有できますし、相互のコミュニケーションを活性化させて診療に役立つ可能性もあります。しかし、こうしたリマインダー機能や服薬記録を必要とする患者層と、スマートフォンにアプリをダウンロードし使いこなす IT リテラシーの高い患者層は、一致していないように思われます。

今回のブリーズヘラー®センサーの普及を阻む最大の要因は、「想定される使用患者層とデバイス操作性のミスマッチ」にあるのではないのでしょうか？吸入が遵守されない原因には、「意図的なもの」「意図されないもの」2つがあります。「意図的なもの」である場合、患者さん本人に吸入を回避したい具体的な動機があります。ゆえに、いくらリマインダー機能のあるデジタルデバイスを導入してみたところで、その機能が活用されることはありません（目覚まし時計を止めて二度寝するようなものです）。



「意図されないもの」には、認知機能が低下し服薬管理能力が低下しているご高齢の患者さんや、面倒くさがりで忘れがちな若年患者さんによるものが代表例としてあげられます。原因に相違はありますが、いずれも結果的に IT リテラシーは低く（スマートフォンを適切に操作して毎日決められたように使用はされず）、活用されることはなさそうです。

ブリーズヘラー[®]センサーが画期的なデジタルデバイスであることに間違いはありません。こちらをいかに患者アドヒアランスの向上に資するように運用していくか？「ブリーズヘラー[®]センサー」の使いどころについて、臨床現場での模索はまだまだ続きそうです。

（文 埼玉県立循環器・呼吸器病センター 呼吸器内科 高久洋太郎）